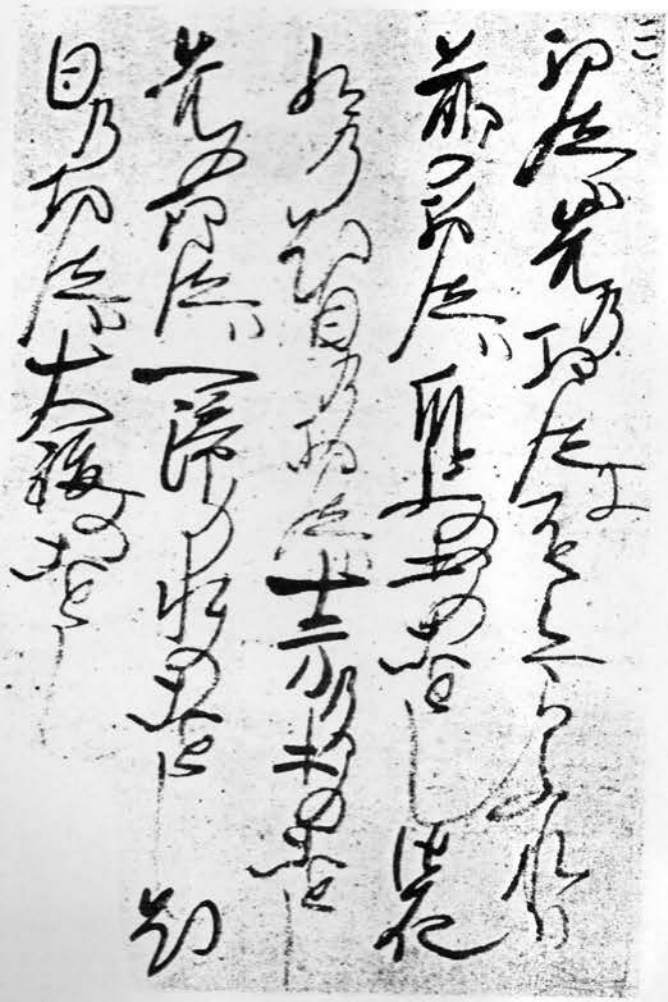
今月の御聖訓



功徳は先の功徳にたくらぶれば、
前の功徳は爪上の土のごとし、法華
経の題目の功徳は十方の土のごとし、
先の功徳は一滴の水のごとし。題
目の功徳は大海のごとし。

【題目功徳御書　一三〇〇頁】

目　　次

今月の御聖訓
新年挨拶……菅野憲道　1
年頭の辞……尾林弘三　2
お講講話「信とは自ら随喜すること」……菅野憲道　3
読書案内『阿部健次郎の保育園日記』……松田銘道　9
【寄稿】「北欧の旅」……金丸美恵　10
《一日講習会から》
【講義】「四苦八苦について」……大谷吾道　12
《御会式御逮夜講演》「『信仰者の心ざし』とは」……神屋正明　15
天地つかの間［その㊃］……成田詳道　18
恵日だより……20
一月の行事　睦月詠草　恵日俳壇

表紙写真撮影：松井義信氏　題字：立正安国論より拝写

新年挨拶

化儀即法体

菅野憲道

あけましておめでとうございます。

本年もつつがなく信心相続して、いよいよ法華本門の大白法の冥益に浴せられますようにお祈りします。

さて近頃は、合理主義がきわまったのか、人心がドライになったのか、次第に正月行事も簡略化し、いつもと変わらぬ休日のように考える人も多くなりました。また日常生活が多忙になったのか、それとも精神的にゆとりがないのか、伝統的な年中行事なども、すたる一方のようです。実質を尊んで形式を軽んずる風潮もその一因にあるのでしょう。しかし、その一方で、コマーシャリズムに乗せられてか、クリスマスや、バレンタインだの、ハロウィンだのと木に竹をついだようなあやしげな行事が盛んになってきました。冠婚葬祭にも、さして意味もないおかしな形式が次々と生まれております。一方で形式を軽んじながら、その一方で、もっと無意味な形式が次々と生まれているような気がします。

さて本宗では古来から「化儀即法体」といわれております。すなわちすべての宗教は一定の形式や儀式等によって信仰の内容を象徴せしめるのですから、その精神的内実を尊ぶことが、形式を尊ぶことと必ずしも矛盾しないのであります。このことは日常生活にも通ずるような気がします。

最近の形式廃止論者のように、あまりにその形を軽視し、一切の形式を排除することは、むしろその精神性すら見失わせるのであり、形式だけ盛んにしてその精神を失うことと五十歩百歩ではないでしょうか。否むしろ前者のほうが形式・内実ともに失ったうえに、つまらぬ形式を生み出すのですから、かえって愚かなこととともいえるのであります。

激しく変化する社会に生きるものとして、我われの生活様式もどんどん変わっておりますが、それらを積極的に受け入れ、順応していくべきものと、大切に受け継いでいくべきものと、しっかり見分けて、大事なものを見失わないようにしたいものであります。

宗祖大聖人「十字御書」にのたまわく、

「正月の一日は日のはじめ、月の始め、としのはじめ、春の始め。此をもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく、とく(徳)もまさり人にもあいせられ候なり。」

謹賀新年

平成十一己卯年

年頭の辞

講頭　尾林弘三

尾林弘三講頭

新年あけましておめでとうございます。

平成十一年の新春を迎え、源立寺法華講の皆様のご健勝と信心にご精進を念じ上げます。

「夫れ以れば末法弘通の恵日は極悪謗法の闇を照らし、久遠寿量の妙風は俄耶始成の権門を吹き払う、於戯仏法に値うこと希にして喩を優曇華の蘂に仮り類を浮木の穴に比せん」（日興上人「遺誡置文」全集一六一七頁）

私達はややもすると信仰の原点、信心の根本を忘れがちになり、覚醒運動が風化しがちになっていないでしょうか。長びく不景気の波は、国の内外に及び政治、経済、社会とあらゆる分野において、混乱と激動に終始して居ります。高齢化の波は、法華講にもじわりじわりと押し寄せてきており、自分の跡を継いでくれる者を育てる必要を実感しております。

「譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷信は磨かざる鏡なり、是れを磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし。深く信心を発して日夜朝暮に又おこたらず磨くべし。何様にしてか磨くべき、只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是れをみがくと云うなり」（「一生成仏抄」全集三八四頁）

と御指南の通り、安逸の日々の中に身を委ねる事なく、寒風に身をさらし、厳しい局面に立ち向かってこそ、自己の成長があると確信し、決意を新たに「法統相続と青年の育成」に真剣に取り組んでいただくことを念願して、年頭の挨拶といたします。

お講講話（要旨）

拝読御書　「日女御前御返事」（全集一二二四頁）

信とは自ら随喜すること

菅野憲道

《「信」の意味するもの》

信心為本ということについては、御書の中にもたくさん出てきます。「念仏無間地獄抄」には、華厳経の経文を引き、

「信は道の源功徳の母と云へり。菩薩の五十二位は十信を本と為し、十信の位には信心を始めと為し、諸の悪業煩悩は不信を本と為す云云。」（全集九七頁）

と、仏教においては信はすべての道の始まり、功徳の根本とも言われ、さらに菩薩道の基本であると言われています。菩薩には十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚の五十二の修行の段階がありますが、その最初に十の信の段階があって、この信から菩薩道が始まるというのです。また仏教のみならず、儒教などにおいても、信は五常（仁義礼智信）という徳の一つに挙げられ、「信なくば立たず」という有名な言葉もあるように、信ということが人倫の根本でもあるのです。

この信という字は「人に言（ことば）」と書きますが、人の言葉や行動を信ずるということで、人の言ったことを逐一疑っていては生活が成り立ちません。スーパーで食料品を買っても、この中に毒が入っていないかなどと考えたら、とても生活できません。毒入りカレー事件などが報じられても、この店は大丈夫との信頼がありますから、カレーも食べられるのです。

辞書で「言（ことば）」という字を引くと、上の横棒四本は元は「辛」という字で、この字の原型は、入れ墨を入れる針のことだそうです。またその下の口は神仏に捧げる器を象徴していて、物を容れる台の上に、「辛」という字を乗せているのは、もし自分たちが嘘を言ったならば、針で刺されても文句は言いません、ということを表しているとあります。つまり、言とは嘘でないという意味で、信の字は「まこと」とも読みますが、その語源は、嘘偽りのない真実を表しています。

仏法においての「信」には、仏を信ずることと、仏説を信ずるという二つの面があります。つまり経文を信ずるということです。

では、信ずるとはどういうことでしょうか。ここが何となく分かりづらい処でもあり、ぼやけたところでもあります。仏法を信ずるといっても、その教法を勉強して理解できなければならない

のであれば、これは誰にでも出来ることではありません。たとえ法華経を全部読んだ人でも、はたしてこれをどこまで深く理解できるものかどうか、疑問です。

御書の中には信ずるということを、

「かつへて食をねがひ、渇して水をしたうがごとく、恋て人を見たきがごとく、病に薬をたのむがごとく、みめかたちよき人、べにしろいものをつくるがごとく、法華経には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし云々」（全集一五五八頁）

と、また「妙一尼御前御返事」にも、

「夫れ信心と申すは別にはこれなく候」（全集一二五五頁）

とあって、この仏法の要諦は、親が子を思うように、子が親を慕うように、恋慕渇仰することと申されていますから、この南無妙法蓮華経の御本尊に、いつでも恋慕渇仰心を起こすことが信心の根本なのです。

1　13版　毎日新聞　1998年（平成10年）12月10日　木曜日
MAINICHI
新毎聞日
真須美容疑者を再逮捕
和歌山毒物カレー事件
住民4人殺人・63人殺人未遂容疑
保険金目当て追及
4人に黙とう
45kW省エネ
ホームポンプ
川東ポンプ
NEWSLINE
和歌山カレー事件関
きょうの天気

ようやく毒入りカレー事件の容疑者が逮捕された

《一念信解とは》

ところで法華経本門では、寿量品で仏の本当の姿を説いた後に、分別功徳品・随喜功徳品・法師功徳品、また不軽品等に、流通分として、この妙法蓮華経の功徳や修行方法、位などが順次説かれるのですが、その中で、妙法蓮華経を信じて修行する者の功徳をあげ、「一念信解の功徳は五波羅蜜の行に越へ」といって一念信解には菩薩のあらゆる修行よりはるかに多くの功徳があり、無限の功徳を有していること、成仏の正因であることを明かされております。すなわち仏法というものは決して修行の量とか、理解の有無ではなく、すべからく仏法を信ずる一念こそ最も重要なのであります。

また、それまで、仏道修行のあり方を五種法師（受持・読・誦・解説・書写）として説かれてきたものを、最後に信念受持といって、この一念信解、すなわち信念受持の一行に統一されたのです。この一念信解は、または初随喜の位とも約されております。

つまり仏法を聞いて「ありがたい」と随喜する人を初随喜とか、一念信解というのです。このことから解ることは、我われが信心が有るとか無いとかいう違いは、仏法を聴聞して随喜の心を起こすか起こさないかということであり、御本尊・大聖人を拝してありがたいとか、嬉しいという心が起きてくるかどうかなのです。

信とは「随喜」「歓喜勇躍」「信楽」などと表現されますが、仏様が法を説かれ、その教えが素直に聞こえてくれば、心に伝わってきますから、随喜の心が生じるのです。だから随喜の心が起きるか否かは、仏法が心で聞こえているかどうか、信心があるかないかのバロメーターとなるのです。

なぜそうなるのかといいますと、人生において甚だしく苦しんだり、悩んだり、迷いという暗闇をたどってきた結果、ようやく

正しい仏法に出会って光明がさしてくれば当然、「助かった！」と随喜の心が起きてくるのであり、それを「飢えて食を願い、渇して水を求め、恋する人に会いたく、病に薬をたのむように」と表現されたのです。

このように我われが生死の道に踏み迷うなかで、この妙法に出会い、この妙法が唯一の正法であることを直観する＝信ずることができれば、即座に「すばらしいなぁ」「良かったなぁ」という安心感や喜びが生じてきます。この仏心と我われの心がピタッと合うことが信ずるということで、感応道交とか、境智冥合、師弟不二などといいます。

仏法を耳や目で聞いても、自分の心に伝わっていなければ喜びの心は起きません。当然仏心と合っていない。それは我われが下根下機にして、我慢偏執の心が強いからです。

例えば、日蓮大聖人ご在世当時も、大聖人にお会いして、その振る舞いをみて、深い理屈は知らなくても、即座に感激し、ありがたいと思って帰依された方もおられたでしょうし、逆に反感をもった人もいるでしょう。いまも仏縁は一様ではなく、十人十色で、素直に信を起こす人、迷い続ける人、反発する人、さまざまです。

しかし、同じような苦しみに値ったりすると、案外共通しあうことがあるようです。「同病あい哀れむ」などといって、同じ病気で入院して、病室で体験などを話していると、忽ち昔からの友達みたいな間柄になったりします。

阪神淡路大震災の時なども、生死の境に立たされて、ギリギリのところで、共通の心理が生まれて、心と心が通い合うというような状況が起きました。つまり人間としての根元的な問題を、自覚し、共有することによって、人間同士の心の交流が生まれ、相互理解や信頼関係が生まれるということであり、感応道交ということも似たようなものです。

よく人とのつき合いは苦手だけれども、草花を上手に育てる人がおりますが、こういう人は植物と対話をしているのです。自分の子供や孫は何も自分のいうことを聞いてくれなくても、草花は毎日面倒をみれば、その通りに反応し答えてくれる。自分が手を抜けば枯れてくるし、こまめに水や肥料をやり雑草を取れば、それだけ立派な花を咲かせてくれます。これは自分の心と草花との間に、なんらかの共鳴するものを持っているということです。これは犬や猫でも同じことで、みな互いに生き物ですから、心の奥底に触れあうものがあり、そこに気がつけば、生き甲斐にすらなるのです。

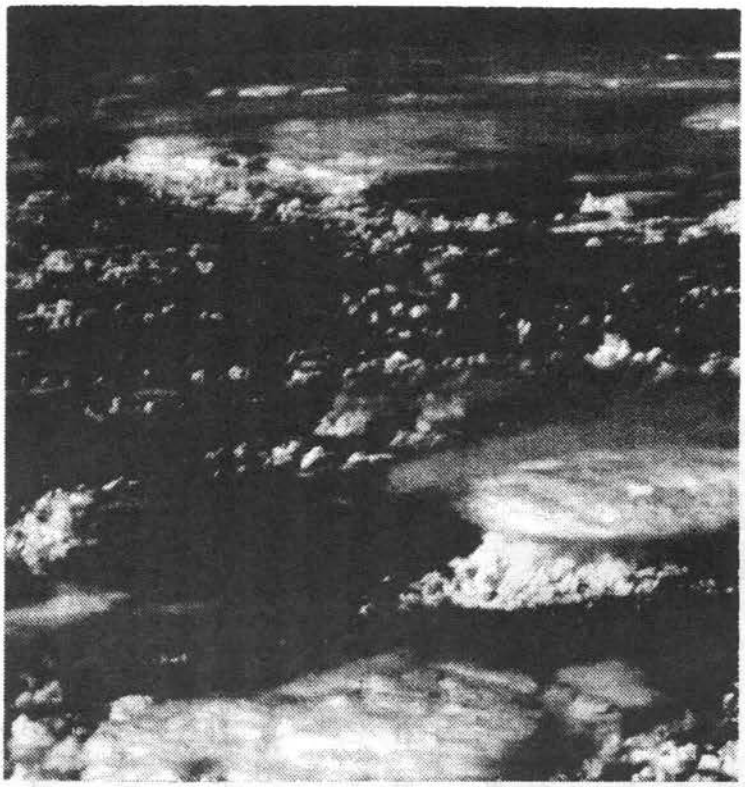
動物や植物とも心が通い合うのですから、これが転じて、本仏の慈悲を信ずることによって、次第に我が心と仏心が通じて、そこにおのずと仏智もそなわり、必ず成仏もかなうことになるのです。

《稀有な存在としての人間》

我われの住むこの地球から空を見上げますと、どこまでも青空が広がっているように見えます。この青空は、大気圏のことであり、せいぜい二十～五十㎞ぐらいしかありません。だいたい十㎞の上空では極端に酸素が薄くなり、そのままでは生きていられません。ヒマラヤ山脈の頂上でも約八千ｍですが、酸欠状態で高山

病に罹ってしまいます。この高さ二十km、海底で深さ十kmがあらゆる生物が存在できる範囲です。その生命が存在する地表のことを想像してみましょう。

かりに地球を直径二十センチの球体とすると、この大気圏はわずか〇・五ミリ以下の薄さということです。地球という惑星の、ほとんど皮膜のような薄い部分にのみ、気温・水・空気等がつねに絶妙にコントロールされ、生物が繁殖できる条件を備えている空間があるのです。このわずかな世界に五十億の人類とそれを支えてなお余りある無数の動植物が生存しているのです。



地球環境を維持する大気圏

宇宙開発などといっていますが、スペースシャトルなどもこの比率でいうと、わずか一cmたらず離れたところを周回しているに過ぎない。そして、月は約六m離れたところを直径三cmぐらいの球体が地球の周りを回っている計算になる。また、太陽は二、三kmほど先に直径二十二mぐらいの球体としてあることになる。……ずいぶん我われの感覚とはかけはなれていますが、このように、想像もつかないほど広大な宇宙空間に、ポツンと浮かんでいるのが地球なのです。

この地球のような条件を備えた惑星は稀有のことであり、その存在そのものがもう奇跡的としかいいようのない不思議な現象であり、確率からいえば、億兆分の一もありえないほどの確率で、我われの母なる地球が生きているのです。我われ一人ひとりが生きていること自体が不思議なことですが、地球の存在ということも大変に稀有なことなのです。

人間一人一人が生きていることは、自然界と渾然一体となって生かされている姿なのです。そして、おそらく昔の人間は、もっと自然と親密に生活し、自然崇拝のような宗教心をもっていたことで、おのずからこうした人間存在の根元的命題を直観的に感じていたのでしょう。……虫や草木も、人間も、本質的にはなんら変わりがないこと、二度と無い人生、かけがえのない生をいかに生きるのか、言外の中に自覚していたんだと思います。ところが現代人は、生活環境が人為的になるにつれ、自分も自然の一部であることを忘れ、次第に自我意識にとらわれて視野が狭くなって、自分が生かされているという本質すらが分からなくなってしまったのです。

そして大方の人が、人間社会の生活を送っていますと地位とか名誉、財産、外見や能力だけをみて、自分は不幸だとか恵まれない等と不平不満ばかりになったり、あるいは他人に勝ったとか負けたとか、目先のことばかりに翻弄されてしまっているのです。

赤ちゃんや幼児を見ておりますと、いつもニコニコしている。生きていることが楽しくて仕方ないといった笑顔をしている。小さい頃は誰でもそうだったのです。それが長い間社会生活を営み、自我意識が発達してくると、次第に心が濁ってくるせいか、眉間にシワを寄せて、疲れた顔、険しい顔をして生きるようになる。

《すべてを肯定》

自然界をみますと雑草として育っても、大木となって育っても、日陰で暮らそうと、陽当たりの良い場所で暮らそうと、桜も松も竹もみなそれぞれに自分の命を生き生きと生きています。樹木や草花だけでなく小さなカビのような生き物ですらそうですが、つまりは与えられた命を精一杯に享受しているのです。ですから本来は人間も、自分が生きていることを心の底から喜び、自分の生そのものを肯定して生きるところに、本当の生命力が発揮されるのではないでしょうか。また、生きていること自体が楽しいという元気のある人は、人生もうまくいくものです。

サツキがブームになったことがあります。このサツキの種類に晃山というどこにでもある品種があります。これなど苗を育てても、一株百円か二百円にしかならない品種ですが、一度これに珍しい花芽が出ますと一芽何十万円とかいわれたことがあります。ランの愛好家の世界でも似たようことを聞きます。しかし、これは人間が勝手にサツキにランクづけして、稀少さを珍重して高値をつけるのです。植物の側には何の関係もないことです。平凡な種も稀少な新種も、それぞれ精一杯花を咲かせます。どれが美しいかといえば、本当はみなどれも美しいのです。どれでも稀少なのです。そこへ人間の投機心や所有欲、優越感などを持ち込んで値段をつけてみても、そんな評価は当てにならないし、またすぐ変わるものです。

実はこのことは人間にも同じことがいえます。大会社の社長になろうと、市井に隠れた無名の職人であろうと、そんなことは大した問題ではありません。大切なのはその人が、いかに有り難い命を享受し、感謝しながら生きているかということです。そしてその命を、モノやお金を得るために燃焼させるだけでなく、真善美というような真の価値を実現させるために生きることが、その生を充実させることにつながるんだと思います。

そうなりますと、人間の幸せとは沢山の財産を所有することや出世することではなく、自分が生きているということを素直に感謝し喜ぶことができること、あるいは人生の艱難辛苦をすべて肯定して、いつでも前向きに生きる姿勢を持てることであり、生きることの意味をわかる事だと思います。そのためには、まず生命の奥底に本当の信仰世界を持つことではないか。それが本当の幸せではないかと思います。仏法とはそういうことを解き明かしていると思うのです。

我われが信心をするということは、過去・現在・未来の三世を一貫する妙法蓮華経の中に、我われは生かされていて、初めから妙法によって生かされている、みんなが妙法蓮華経の命を持って

いるということを、素直に信じて生きることではないでしょうか。

人には自分の出生や環境や、親の愛情に疑問を感じたりする時期があります。不運続きで悲観的になることもあります。しかし本当は何も心配することはない、人生におけるどんな苦しみや悲しみも、むしろそれらがあるからこそ、より深い幸せが味わえるのではないでしょうか。

結局は仏法にあえたこと自体が大きな功徳であり、妙法蓮華経を信ずることができることが本当の幸せだと気がつかなければならないのです。そうすれば、妙法蓮華経を聞くことができたことが、そのまま直ちに随喜の心となり、その随喜の心が功徳の源になるのであります。

所詮、人生も一睡の夢です。そのドラマは、どのような配役を与えられたかによってきまるものではありません。ドラマが感動的なのは地位や名誉や財産などの配役の設定ではなく、その人間が、与えられた境遇の中で、いかに真実に生きたか、いかに利他の心や、美しい心を発揮したかにあるはずです。職業や地位はそれらの精神を発揮するための道具立てに過ぎないのです。

もちろん現実の生活にさまざまな喜怒哀楽があることは何人も否めません。しかし、法華経の信仰の功徳とは、その心の奥深くで、もっと深い次元で人生を自受法楽できる境界が開けてくるのではないでしょうか。とかく人は、信仰までも皮相的に解釈し、日常生活で起きる現象に一喜一憂し、損得勘定になってしまいがちですが、そんなことは本当の信心ではない。本当の意味の幸せとは人の生死を貫いて、安心とか喜びを一貫して持ち続けられることだと思うのです。

《啐啄の機を待つべし》

初めに述べた通り、妙法蓮華経を信ずることが自分の喜びと感じる、いいかえれば、何か日常の自分ではなく、心の奥深くで、新たな自分の命が蘇るような自覚、本当に大切なことに気づき目ざめさせていただくところにあるんだということをご理解いただきたいと思うのです。

「啐啄の機」といって、卵が孵化する時、殻を割るには、雛が中から合図を送り、親鳥は外からつついて殻を割るといいますが、これと同じように、我われも、仏法を一心に渇仰恋慕していると、いつか必ず己心中に仏心が育って、仏力法力と信力行力の感応して一生成仏の境界にいたるのです。それはちょうど、ある日卵が孵化するように、自分がこの仏法に巡り値ったことを、人間に生を受けたことをしみじみと有難く感じられる時がくるのです。これを一念信解・初随喜の位即ち末法における一生成仏の姿というのであります。

それまで仏様の慈悲の心を信じて、せっかくめぐりあった法華経の信仰を大事に暖め続けていって欲しいと思います。

南無妙法蓮華経

（了）

本当はみなどれも美しい

勉強ができることがいいことだと考える大人の知育偏重の価値観に、子どもの教育環境はすっかり汚染されてしまっている。既成の枠にはめられた教育に危機感を懐いた著者とその四人の仲間は、子どもたち自身がそれぞれ秘めている能力を引き出す教育を自らの手で行いたい、そんな夢を膨らませていた。「太陽の子保育園」の誕生はその夢がもたらしたものだ。

夢の実現は、やたらと煩雑な手続きの不便さや補助金の配布のあり方など、行政の貧困さを痛感することからはじまるが、そんなことはまだ序の口だった。

それよりも大変だったのは、子どもたちとの生活について、それなりの実習を重ねてきたものの、いざ蓋を開けると想像以上の苦労、苦悩が若い保母、保父さんを襲ってきたことだ。しかし、それも全身全霊で子どもに立ち向かうことによって克服していく。

子どもを見つめることと、自分を見つめることの智恵が身についてきたのだ。三歳になっても、まだ生後六ヶ月の発達指数しかない重度障害者のきよこちゃんとの生活もそうだ。

そもそも障害者という呼び方を嫌う著者は、重度障害者が集団生活に不適当の理由で入園を認めない行政を強く非難する。きよこちゃんは、制度の壁でやむなく園に遊びにきてもらう形で仲間入りしてもらう。

読書案内

松田銘道

灰谷健次郎著

『灰谷健次郎の保育園日記』

新潮文庫

定価五六〇円

自力で自分の体を動かすことのできないきよこちゃんの目はうつろで無表情。だれもが最初はそう思っていた。しかしともに生活していく中で、話しかけるとはっきりと首を振ってうなずき、笑顔も見せる。感情の高まりもある。そのことがほんのわずかな表情を通して伝わってくる。こうしたことが、ともに生活する中で生まれてきた。

子どもとともに自分も育つ。そこからやがて「ぼく、ここの保育園好き」といった園児の声が聞かれるようになってくる。生きた教育の誕生だ。

能力主義の教育では子どものいのちは育たない。そんな思いを本書から感じとっていただけに、「学級崩壊」「授業不能」との見出しで荒れる小学校の実体が報道されてきたが、授業不能・学級崩壊という現象までも全国に広がっているとの報告は、学校の存在そのものが危ぶまれていることの表れかもしれない。

授業が成り立たないことで、教師そのものも傷つき、不登校になる。子どもは授業が面白くないといっては教室で立ち歩いたり騒いだりして荒れる。親は教師の指導力不足だと責め立てる。立場による見方の違いばかりに目を奪われているから、解決の糸口が一向に見えてこないのだろう。生きた教育の欠如がそこにはある。

（正覚院主管）

【寄稿】

北欧の旅

宝塚地区　金丸美恵

昨夏、私たち姉妹は、北欧の旅に出かけました。フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、そしてロシアのサンクトペテルブルグを駆け足で巡る十三日間の旅行でした。

まず始めは、ロシアの旧首都サンクトペテルブルグを訪れました。夏とはいえ、気温は十七度、肌寒さを感じるほどです。

空港に着いた時から驚きの連続です。社会主義国への第一歩の印象は、空港からです。国際空港であるはずなのに、何か日本の地方の空港へ立ち寄ったという感じでした。賑やかさや活気というものがまったくなく、殺風景という言葉があてはまるムードです。しかし、街へ行くと古い時代のヨーロッパを思わせる街並みでした。道幅は広く、街路樹が立ち並び、とても美しい街でした。街には、大きな川が流れており、その両側に重厚な建物が軒を並べている、とても落ち着いた所でした。

三人で「ハイ、ポーズ」（ヘルシンキにて）

そして、ホテルに着きましたがここでも驚きでした。日本では考えられないくらいのサービスの悪さです。こういうことは、比べるべきことではないのでしょうが、まったく私たちは贅沢が身に染み付いているというほかありません。

ところで、サンクトペテルブルグでの最大の目的は、エルミタージュ美術館に行くことでした。美術館に展示している作品は、私たちには、馴染みのないものが大半を占めていました。しかし、作品の数たるやすごいもので、とても一日で見切られるものではありませんでした。作品も然ることながら、美術館そのものが、まさに美術品でした。何しろ、ロマノフ皇帝の宮殿だったとのことですから、当たり前のことなのかもしれません。館内は、ヨーロッパからの観光客も多く、入口は特にごった返すようでした。しかし、中に入ると、ゆったり見学することができました。あまりにも広いので、ガイドの方にしっかりついて行かないと迷ってしまいそうでした。私たちは、三時間くらい見学しましたが、十分満足し、旅の一つ目の目的であるサンクトペテル

ブルグを後にしました。

次に訪れたのは、フィンランドでした。ロシアから飛行機で一時間半くらいの近くにある国です。わずかの距離にある所ですが、まるで別世界に来たかのようです。国の方針の違いを肌で感ぜずにはいられません。フィンランドは、森と湖の国といわれるだけあって、とても自然の豊かな所でした。フィンランドを含め北欧の国々は、どこもとても自然豊かな印象をもちました。どの国も、街並みはとても美しく、道にはゴミ一つ落ちていないのが印象的でした。

北欧は、福祉が進んでいるとのことでしたが、現地のガイドさんによると、老後はお金の心配はなく、国が保障するとのことだそうです。教育面も日本とは違い、大学を卒業するまで無償なのだそうです。ただ、日本のようにたくさんの人が大学に行くのではなく、能力に応じてとのことでした。それらの資金は、もちろん税金でまかなっているのですが、消費税がどの国も20～25％もあるというのです。そのほかにも、数々の税があり、そのためか国民は政治に高い関心があるとのことでした。当たり前のことですが、とても大切なことだなあと感じました。

街を走っていて目に付いたことの一つに、自転車が多いということがありました。そして、オートバイの数の少ないことです。話によるとバイクの税金が高く、若い人にはとても手に入れにくいものだそうです。そうしている理由は、若者の死亡率を減らすためなのだそうで、とても考えさせられました。

北欧での目的の一つは、ノルウェーのフィヨルド見学です。その風景は、まさに圧巻です。遠い昔、ノルウェーは、多くの氷におおわれていて、長い年月の間に山が削られ、現在のフィヨルド（峡湾）になったのだそうです。入り組んだ海岸線が陸の奥深くまで続いていました。その川のような海を二時間くらいかけてゆっくりと船で登っていきます。両側には、百メートル以上の崖が続いていました。その崖の上から、いくつもの滝が下に流れ落ちていました。日本であればその一つひとつの滝に名前が付いているところでしょうが、滝に名など付いていません。本当にすばらしい景色でした。

北欧の旅行は、夏に行ったにもかかわらず秋を思わせるものでした。すばらしい自然を身体で感じることができました。機会があれば、もう一度訪れたい国々でした。

まさに絶景！（フィヨルドの滝）

《一日講習会 講義(要旨)》
テーマ「信仰の基本」より

「四苦八苦」について

大谷吾道

〈信仰を始めるきっかけ〉

我われの身の周りを見渡すと、財産の有無や、肉身や自身の病気、肉親との死別、恋愛、子供の非行、会社のリストラや倒産、さらには顔の美醜や能力の有無等に至るまで、人によって程度の差こそあれ、苦しみや悩みを持たない人間などいないことに気付かされる。

そんな苦しみや悩みのあるものは、その原因が取り除かれれば消滅する。飢えは食物が与えられれば飢えの苦はなくなるし、職が見つかれば失業の苦しみや悩みは解消する。家庭生活や社会生活上の一般の苦は、解決に至るまでの難しさに差はあるものの、とにかく解消は可能である。

しかし、どうしても解消されない苦悩もある。だんだん年をとって老いていくことの苦しみを止めることはできないし、どれだけ医学が進歩した今日でも病気の不安はまだなくならない。

さらに、キサー・ゴータミーの例を挙げるまでもなく、死は誰人たりとも避けることのできないことである。これらいわゆる「生・老・病・死」というものを、仏教では「四苦」といい、我われが避けて通ることができず、それ故に悩み苦しむと説く。

さらに仏教では、これら生老病死の四苦のようにそこから脱れることができない身体上のことばかりでなく、もっぱら精神的な面をいう四つの苦を説く。すなわち、愛する人と別れて、離れなければならない苦しみをいう「愛別離苦」。怨んだり、憎んだりして二度と顔も見たくないような人と会わなければならない苦しみ(「怨憎会苦」)。欲しいものを得られない苦しみ(「求不得苦」)。それに「暑い」とか「寒い」とか「痛い」とか「腹が減った」とか、もろもろの感覚器官が感じる苦しみをいう「五陰盛苦」。これらの四つの苦と、生老病死の四苦とを合わせて「八苦」といい、それらが複雑に絡み合って我われを苦しめ悩ませると説く。

しかし、大聖人の御書には、

「病によりて道心はをこり候なり」(全集一四八〇頁)

とあって、この病(苦)の存在が道心、志を起こすきっかけ、信仰のきっかけになるといわれているが、このことはそれらの苦しみや悩みを解決、克服したいとの思いが、大聖人の仏法に巡り会い信仰する、あるいは信仰を自分自身のこととして把え直す直接・間接のきっかけとなり得ているということである。

そして、これら四苦八苦といった苦しみ

や悩みを、実は仏教を始められた釈尊も、また日蓮大聖人も持たれ、その解決、克服のためにともに出家し修行されたのである。つまり釈尊の出家の動機も大聖人の出家の動機も、また我われの信仰のきっかけも、ともにこの四苦八苦の存在とその解決にあったといえるのである。

〈釈尊の出家の動機〉

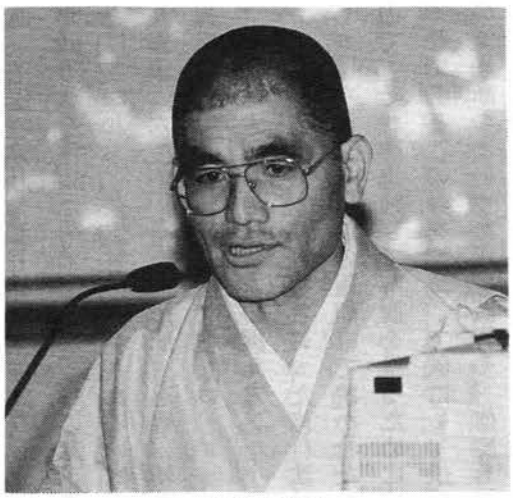
釈尊には「四門出遊」という話がある。インドの王族の太子と生れた釈尊は、何一つ不自由のない生活を送っていたが、ある時、郊外へ遊びに出かけようとして、東の門から城外へ出かけたところ、道すがら、歯は欠け落ち、腰は曲がり、やせ衰えてよたよたと杖にすがる老人の姿を見て、深い憂いを覚え王宮に引き返し、次に南門から出かけると、路上で病に苦しみあえいでいる病人に出会い、また西門から出かけた時は、大勢の人が泣き叫び、悲しみにくれる葬列に会い、病や死に対する苦悩を深めたという。しかし、最後に北の門から出かけた時は、苦悩のかげりのない浄かな姿の修行者を見て、大きな喜びと感動を覚え、それを機に釈尊は出家したといわれている。

生老病死の現実と、それらの苦悩から解放されている姿を目の当たりにしたことが出家の動機となったのである。

〈大聖人の出家の動機〉

大聖人においては、その出家の動機として「妙法尼御前御返事」に、

「念願すらく、人の寿命は無常なり。……されば先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふべしと思ひて、一代聖教の論師・人師の書釈あらあらかんがへあつめ云々」（全集一四〇四頁）



大谷吾道師

とあるから、四苦の中の死ということの解決のため学問を志し出家され、諸宗乱立の仏教界の中で、釈尊の本意は何かを探り、人間の根本的な苦悩の解決を目指されたのである。

〈釈尊の悟ったこと……縁起観〉

さて、生老病死という苦の原因を究め、その解決を志して出家した釈尊は、難行苦行の末に悟りを得られたのだが、釈尊が悟られた内容は一言で言えば「縁起」ということである。

縁起とは、字のごとく「縁りて起こる」ということで、世の中の一切の事物が、すべてさまざまな原因や条件に縁って（依存、関係しあって）起きていることをいう。

縁起は、また無常とか無我という言葉でも説明されるが、平たくいえばこの世の中の一切の物事は持ちつ持たれつであって、他のものとの縁（関係）を持たずに存在しているものなどないということと、この世の中に絶対的なものなどなく、すべて相対的であり一切のものは変化する。また、あらゆる現象には必ずそれを引き起こした原因があるという因果律である。

この縁起が物事の真実の姿なのだが、物事は自分の思い通りにはならない（＝苦）のだが、にも関わらず自分だけは何とかなるだろうと自分中心的な考え方をして、命に身体に、財産に、名誉に執着し、そのた

めに悩み、迷い、憎しみ、怨みなどの煩悩が生まれ、さらに煩悩にくらまされて人は身を焦がすことになるのである。その煩悩が生まれる原因が無明といって、世界は連鎖であり、互いに依存しあっているという真理に対する無知から、自己中心的に行動する心の働きが煩悩を生み出し、私たちを四苦八苦に悩ませているというのである。

釈尊の悟りの内容については、特に十二因縁（無明・行・識・名色・六入・触・受・愛・取・有・生・老死）という言葉で説明されるが、同じく人間として避けることのできない老死を観察の出発点として、突き詰めていくとその根源には無明があると説明したものである。

そこでこの世界で、生きていくには、自分中心の考え方を捨て、縁起の道理をわきまえて、極端に走らず、常にバランスのとれた生き方、すなわち中道の生活をすることが大切で、これが実現した時、人は煩悩や苦から解放されると教えたのである。

〈釈尊が弟子たちに説いたもの〉

そして、その苦悩を取り去る方法として、釈尊は弟子たちに苦・集・滅・道の「四諦（四つの真理）」を説いたのである。

簡単にいえば、苦しみの姿（苦諦）とその原因（集諦）、悟り、解脱の姿（滅諦）とそこに至る方法（道諦）を諦（あきら）かにしたということであり、その解脱へと至る方法として、八正道――正見（正しい見方）正思惟（正しい思考）正語（正しい言葉）正業（正しい行為）正命（正しい生活）正精進（正しい努力）――という八つの正しい実践方法を示したのであるが、この八正道とはすなわち、戒定慧の三学、あるいは六波羅蜜（六度――布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智恵）の修行に他ならない。

〈日蓮大聖人の仏法での捉え方〉

さて、三学や六波羅蜜といった修行法は、もっぱら法華経以前の爾前経で説かれたもので、それを実践して解脱を得るためには、不浄であるこの身を燃やして灰にして煩悩の元を断つといった灰身滅智や、何度も何度も生まれ変わって修行を続けるという歴劫修行が求められたのであるが、これらの修行は、滅後末法の愚悪の凡夫である我われには到底不可能なことであった。

そこで、そんな我われのために大聖人は、法華経に依ることによって、苦しみや悩みの元となる煩悩を滅するというのではなく、

「此の毒（苦集の二諦）を生死即涅槃、煩悩即菩提となし侯を、妙の極とは申しけるなり。」（全集一〇〇六頁）

と、煩悩を持ったままの成仏を示され、その方法としては、歴劫修行に依るのではなく、

「戒定恵の三学、妙法蓮華経なり」（全集八二七頁）

「六度の功徳を妙の一字にをさめ給ひ」（全集一二一五頁）

等と、三学、六波羅蜜の修行をもおさめた妙法蓮華経に依るということであり、それはまた、

「仏になる道には我慢偏執の心なく、南無妙法蓮華経と唱へ奉るべき者なり。」（全集五五七頁）

とあるように、南無妙法蓮華経の唱題に依る成道を勧められたということである。

そして、その煩悩を持ったままの我われにとっての成道の要諦について大聖人は、

「苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思ひ合はせて、南無妙法蓮華経とうちとなへゐさせ給へ。これあに自受法楽にあらずや。」（全集一一四三頁）

と仰せられている。

《御会式御逮夜講演（要旨）》

「信仰者の心ざし」とは

正蓮院主管　神屋正明

本日は、源立寺の御大会式御逮夜法要、誠におめでとうございます。

さて、正信会では、『正信会報』という会報を発行しており、私はその会報の編集に携わる者として、毎月開催される正信会の委員会に出席させていただいていますが、過日の委員会では正信会の顧問弁護士に出席いただき、種々話し合いが持たれました。

その中で、最高裁での判決についての話があり、弁護士が最高裁判決の趣旨説明をする中で、正信覚醒運動とは宗門を二分する戦いで、その正邪は歴史的経過の上で判断すべきであり裁判所では扱えない事項である、とのことを聞きました。この件については、同じことをかつて幾度となく聞いたことも記憶にはありますが、その時は妙に新鮮に耳に入ってきました。

現在、宗門と創価学会がお互いのトップである、阿部師と池田氏のスキャンダルを暴いて攻撃し合う姿を見るにつけ、正信覚醒運動は、歴史的経過の上で正邪は御本仏様より明確に判断が下されたのではないかとの思いに駆られたのであります。

即ち、私の師匠は平成二年に亡くなったのですが、亡くなってわずか十日後に宗門側の僧侶と学会の弁護士が正蓮寺に乗り込んで来て、有無を言わさず執行官に指示して、あろうことか信仰上最も尊い御本尊に対して仮り差し押さえの張り紙を一緒にしていた光景を思い出すのですが、その平成二年から今日の平成十年という年月の間に、宗門と創価学会が同士討ちする姿を見るにつけ、明らかに御本仏様の御眼は、正信覚醒運動に対する正邪をお下し賜ったものと感ずるのであります。それが故にまた、いやが上にも「我らこそ富士の本流」とのテーマを掲げる我われ正信会の僧俗としての、使命の重要さを痛感せざるを得ないのであります。

※　※　※

さて、先日、「人間ドキュメント『夢はるかなる山々へ』八十五歳二百回目登山」というテレビ番組がありました。初めは、八十五歳の老人が山に登るというのですから、日本の美しい山々に登る老人を題

執行官に立ち会っている学会の弁護士

材にした、自然環境問題でも取り上げた番組かと思っていましたが、そうではなく八十五歳の老人がヨーロッパアルプスの四千メートルを越える険しい山に挑むというものでした。

その方は、かつて久留米大学の医学部で外科医をしていた方ですが、何故にそのような険しい山に挑戦するようになったかというと、この人の医者としての夢は、アフリカの黒人医療で活躍するシュバイツァー博士の元で難民の医療に従事したい、とのことであったそうであります。

やがて、夢がかなってシュバイツァー博士のもとで医療活動に従事する中で、シュバイツァー博士から、

「医者として志すなら医学の外にもう一つ夢を持たなければだめだ」

と教えられたそうで、そのことが山登りの起点となったと語ります。

そして、六十歳の還暦の祝いにはマッターホルンという五千メートル級の山に登り、その後も日々に健康に留意し、七十歳の時の健康診断では、二十歳代の健康状態であったと語っていました。そして、六十五歳で外科医を止め、現在は講演活動を主にしているとのことですが、ある地域団体が主催した小さな講演会での話の中で、

「歳は年々歳を重ねる事で老いるのではなく、夢を失う事によって老いるのだ」

と語っていました。

私は、その老人の語るシュバイツァー博士の「医者を志すならば医学の外にもう一つ夢を持ちなさい」という言葉と、「歳は年々歳を重ねることによって老いるのではなく、夢を失うことによって老いるのだ」との言葉に非常に感銘を受け、この言葉は何かしら私たちの信仰にも通ずるのではないかと、その老人の話にいろいろな思いをいたしました。

講演される神屋師

紹介した老人は「夢を失うことによって老いるのである」と語りますが、私たちの正信覚醒運動もはや二十年の歳月を経過し、当初二十代・三十代であった青年も、四十・五十という歳になっておりますが、私たちも山登りに挑戦する老人が言うように、正信覚醒運動という信仰の中の夢だけは生涯持ち続けて、臨終の時まで決して失いたくないものであります。

※　※　※

大聖人様は「可延定業御書」に、

「命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをのぶるならば千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは寿量品のゆへぞかし。閻浮第一の太子なれども短命なれば草よりもかろし。日輪のごとくなる智者なれども夭死あれば生犬に劣る。早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。」（全集九八六頁）

と仰せですが、この御書は、富木常忍の病気の奥様に対する励ましの御書と拝しますが、その中で大聖人様は、

「今女人の御身として病を身にうけさせ給ふ。心みに法華経の信心を立てて御らむあるべし。」（全集九八五頁）

と仰せられ、その次に続けられるご文が、「命と申す物は一身第一の珍宝なり。」とのご文であり、「早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ（病を）御対治あるべし。」と仰せなのであります。

私たちが住むこの娑婆世界は「忍土（にんど）（忍ぶ土）」といわれるように、生老病死という四苦はまぬがれることのできない定めであります。しかし、強盛な法華経、御本尊に対する信心の心ざしがあるならば、生老病死の四苦がかえって、いよいよ法華経に向う心ざしを培ってくれるとの仰せではないかと思います。

私自身にもいろいろなことがありました。師匠が亡くなって正蓮寺を明け渡す時のこともそうですし、阪神大震災では、布教所である借家が潰れてしまいましたし、現在の正蓮院を建てようとした時には、近隣から反対運動もどきのようなことが起こり、自分の目の黒いうちに何とかお寺を建てて欲しいと、一生懸命御供養される所属の年老いた信者さんの思いを感じた時、もし反対運動でお寺が建たなかったらどうやって責任をとろうか、と御本尊様の前で胸が苦しくなるようなこともありました。

そのような困難を何とか信者さんとともに乗り越えてきたのですが、その中で私はみなさんと一蓮托生の同志であるから、臨終の時はどうか私を呼んで下さいといつも言っていたのですが、去年、総代さんの臨終に際して、私が病院に駆けつけて耳元でお題目を唱える中、唱題の声を聞いて安心したように息を引き取られる姿を拝見するという経験をしました。

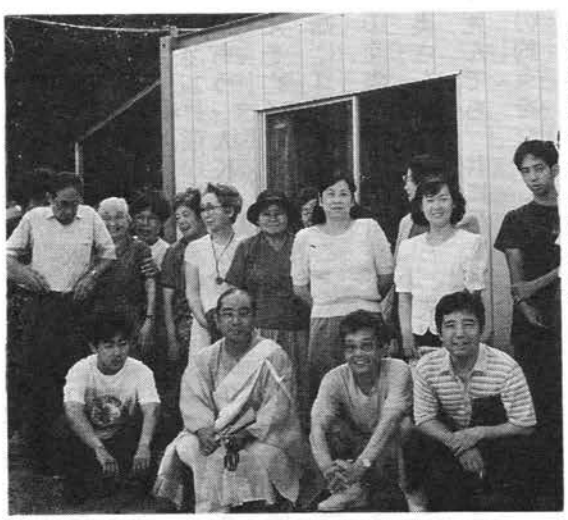
私自身、僧侶の一つの理想の姿であると考え、今はの際にお題目を勧めてあげたいと常々願っていたのですが、その思いが長年信者さんとともに正信の道を貫いたことによってさせていただけたと、この二十年の歩みが尊いものであったと改めて思えました。そしてさらに、いろいろな困難があったからこそ法華経に向う強い心ざしが培えたと実感できたようにも思えました。

法華経の寿量品の自我偈に、

「常に此に住して法を説く、我常に此に住すれども、諸の神通力を以って顛倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ。衆我が滅度を見て、広く舎利を供養し咸く皆恋慕を懐いて渇仰の心を生ず」

と説かれていますが、私共信仰者の心ざしとは、飢えた時に食を求むるがごとく、仏様に恋慕申し上げ、一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまない心ざしの中で南無妙法蓮華経とうち唱えることではないかと思います。生きるということは勿論大切なことですが、生きることばかりにとらわれていると、本来の心ざしのある信仰心とは違った、我慢偏執の心でしか信仰できないのではないかと思います。

どうか自分の大切な身命を惜しまない信心、心ざしということを、心にとめていただきますようお願い申し上げ、本日の私の話とさせていただきます。



震災後、しばらくは仮設の建物だった

幽霊はいるかと聞かれたら、躊躇することなく、居ると答える。だがそれは円山応挙や泉鏡花の描く、おどろおどろしい幽霊ではなく、人が死して後になお、今世に働きかける魂の話である。

＊　＊　＊

Mさんが源立寺の門を叩いたのは、平成二年だった。その時は生活に疲れ、病

天地つかの間

〔その三十三〕

成田詳道

気がちで見る影もなかったが、徐々に健康と精神を回復し、やがて三十余年前に死んだご主人の永代供養を願い出た。

無頼漢で酒乱のご主人が、離婚後に不慮の事故死を遂げたと聞いても、悲しいとも感じず、葬儀にも出なかったことが、近頃むやみに可哀想に思えるからと、自分の分と併せて手続きを済ませた。

しかし、二年ほど前からまた体調を崩し、入退院を繰り返し始めた。民生委員の世話になり、天涯孤独だから死んだら、すぐ源立寺に連絡してくれと、口癖のように頼んでいたという。

そのMさんが、桃の花の咲く季節に死亡し、私は福祉課の人達と密葬を行い、遺骨は約束通り源立寺に永久納骨されることとなった。

ところが納骨の日に、母親と名乗る老婆が現れ、数日後には義兄夫婦までが来て、お骨を渡して欲しいと申し出た。云く「生前は迷惑ばかりかけるので、親類づきあいを義絶したが、死んでしまえば不便なので、一心寺に納骨したい」と。

一心寺とは大阪天王寺区にある、浄土宗の寺で、遺骨を固めて仏像を造ることで有名な寺である。葬儀の後で、次々と出現した肉親もさりながら、合点しかねる申し出に、福祉課の人に連絡を入れた。

すると本人から生前に、こみ入った事情を聞いていたようで「えーっ、義兄が来ましたか？どっちが迷惑かけたのやら……」と、語気を強く荒げた。

結局、遺骨は本人の希望通り、源立寺に永久納骨と落着した。

＊　＊　＊

もう一人Kさんの場合。昨年末に奥さんを亡くしたKさんは、身寄りがなく極端に耳が不自由なこともあって、他人との交際を嫌い、断ってすらいた。そして奥さんの生存中から、夫婦どちらが先に死んでも、共に源立寺へ永久納骨するとの約束を交わしていた。

その奥さんが死亡して約半年後の夏に、Kさんは、孤独死で発見された。やがて自宅を整理しに行った、市役所の人が仏壇や恵日などを見て、源立寺の信徒と気づき、奥さんの一周忌が目前にせまる歳の暮れ、Kさんの遺骨供養を依頼に来た。

実は奥さんは再婚で、すでに成人した子供たちと、近くにお墓もあるのだが、Kさんの遺骨引き取りは拒否したそうである。

そういえば、その子供たちは創価学会のようで、奥さんの満中陰が済むと、遺

骨を引き取って帰ろうとしたのを、Kさんが本人との約束だからと拒否して、では分骨ならばと、ようやく譲歩する場面があった。

血の通った母親が亡き後では、子供たちにとっても、創価学会を批判し、頑固で耳の不自由な老人は、厄介な義父でしかなかったのかも知れない。

しかし兎にも角にも、Kさんの遺骨は奥さんと共に、源立寺へ永久納骨されることとなった。

＊　＊　＊

私はここでなにもMさんや、Kさんのお骨が源立寺に永久納骨されたから良かったとか、されなければ不幸だったとかと云うつもりはない。ただ二人とも目立って強情な信心をしていた風にも見えなかったが、純粋な信仰をもっていたと断言できることだ。

二人は別に何を望んだわけでもない、ただ死んだら永久納骨して欲しいと願っていただけで、その素直な思いが死後に、肉親でもない周囲の人間を突き動かした、としか考えられないのである。これは健全なる幽霊と言っても良いだろう。

吉川英治の「三国志」の中に「死せる孔明生きる仲達を走らす」といった章題があったと思う。中国の五丈原にて魏と対陣中の蜀は、軍師・諸葛孔明の病死を隠し、密かに撤退し始めたが、さすが魏の名将司馬懿仲達も、孔明の知略を警戒するあまり、追い打ちを駆ける絶好の機を逃してしまう。

日本でも武田信玄が織田信長と対戦し、三河の野田城を攻撃中に、突如死亡するが、その死を秘して甲斐国まで、全軍無事に撤退した例がある。

死んだ者が生きている者を翻弄する、死してなお影響を与える。これは死者の魂が強い精神力を持ち続け、生きる者を媒介として現実を動かしたのである。

では幽霊は生きている者に祟りを成すかと聞かれれば、それは生きている者の六根（眼耳鼻舌身意）が清浄か、否かで左右されるだろう。健全で清浄な六根をもっていれば、おどろおどろしい祟りを受けるとは思えない。

もっとも落語の方では、占い師から、

「お前には祖先の霊が取り憑いている」

と脅かされて、

「子孫に祟るような先祖は、こっちから勘当にしてやる」

と啖呵を切る、少々乱暴な噺がある。

私は当節の宗教祈祷師や、いかがわしい占い易者よりも、落語作者の方がよほど健康な精神と、強い判断力をもっていると尊敬している。

（源立寺執事）

円山応挙筆「幽霊」

恵日だより

広基寺御大会式

十二月七日（月）午後二時

今年は北摂の山々でも紅葉の時期が遅れ、師走らしからぬあたたかなこの日、源立寺講中からは有志が車に乗り合わせ、時期はずれの山の錦に眼を楽しませつつ、広基寺のお会式に参詣しました。広基寺は豊能郡能勢町倉垣の地にあって、歌垣山の西裾に広がる倉垣千石谷と呼ばれる盆地に、数件の檀家だけで代々護り伝えてきた富士門流のお寺です。

車を降りてから、小高い丘の上まで、急勾配の細道が続きますが、その両側には能勢の名産である栗の木が林立し、木陰の草むらには収穫を終えて、大きく割れたイガが散乱していました。ちなみに倉垣の栗は「倉垣銀寄」と呼ばれ、能勢栗の中でも最高級品の栗の実をつけます。

竹林と杉木立に囲まれた本堂と境内には、小鳥のさえずりと、吹き抜ける風の動きしか伝わらぬ静寂なお堂に、午前十一時より鐘が鳴り渡り、献膳、読経、申状奉読、唱題と、法要は粛然と続きました。引き続き、ご住職による法話があり、終了後には広基寺の檀家さんによる、心づくしの手料理で、しばし祝宴が催されました。

なお広基寺の中西要蔵氏からお礼の言葉とともに、広基寺にまつわる由緒や能勢の歴史が語られ、歌垣山の碑にある

「くらかきの里に波よる秋の田は
としながひこの稲にぞありける」

という大江匡房の歌なども紹介され、はじめて聞く参詣者はみな一様に聞き入っていました。なかにも昨今の公害騒ぎで「能勢と言えばダイオキシン」と思われがちですが、此処からは離れた場所で、当地には影響ございませんとの説明に、一同爆笑の輪が広がりました。

年末大掃除

十二月二十日（日）午前十時

心の垢まで払い、磨いた年末大掃除

今年最後の寺院参詣であり、法華講の行事ともなり、早くから大勢の有志が大掃除のために結集した。午前十時より、勤行唱題が行われると、ご住職の挨拶があった。「我われの目は普段、対外的景観を見るようにはできているが、自己の内面をみることが出来ない。この自身の内面を見るためには、御本尊という正鏡に向うにしくはなく、自己の心の塵を払うには、唱題するにしくはない。お寺はそのためにある、信心の道場である。この道場を清浄にたもち、そこに於いて自身の心を清浄にすることが大切である。どうか道場とともに、心の塵を払い、清浄な気持ちで、新年を迎えて下さい」（要旨）。その後、御宝前、本堂、境内、仏具磨きと分担し、手際よく清掃が行われ、昼食に婦人部が朝から用意した、豚汁におにぎりが配られた。

なお、来年の大分県での全国法華講大会では、北九州方面を中心に、湯布院や周辺での研修会が予定され、ご住職からは候補先の説明が、ビデオプロジェクターにて、パンフレットを映写しながら話された。

ご案内・お知らせ

＊一泊研修会のビデオについて

昨年十一月の末、和歌山県の加太国民休暇村にて、南近畿正信連合会が主催した一泊研修会の模様がビデオテープに収録され、販売されます。当日は「日興上人の御精神に学ぶ」と題し、普妙寺・石川広覚師、興風談所・山上弘道師、源立寺・菅野憲道師の三名を講師として、ビデオプロジェクターを導入した斬新な企画で、充実した研修会となりました。参加された方も、できなかった方も、是非一度ご覧下さい。完成は来年早々となりますが、詳細は各寺院、または南近畿正信連合会の役員関係者まで、お問い合わせ下さい。

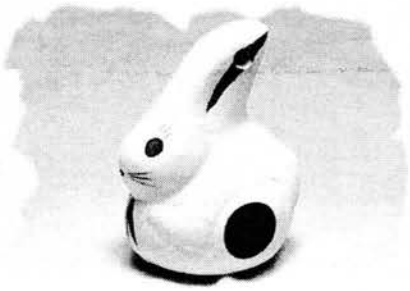
【訃　報】

〔吹田市〕
実正院法啓信士　十一月二十六日寂
俗名　筒井啓司之霊　行年五十六歳
謹んでご冥福をお祈りします。

【恵日俳壇】

〔宮下　留代〕

茶の花を　届けてくれし　友の顔
茶の花は　今を盛りと　匂いける



【睦月詠草】

〔橋本　圓子〕

壇上の　檻に囲まれ　笑む亡夫の
讃辞静かに　式場に流る
現し世の死は　来る世の　誕生日
祝福すべしと　亡夫の口癖

一月の行事

一　日（金）　午前〇時　元朝勤行会
一・二・三日　午前十時　午後二時　正月勤行会
七　日（木）　午後二時　広基寺お講
十　日（日）　午後一時　初お講・合同役員会
十三　日（水）　午後一時　お講
十五　日（金）　午後二時　成人式
十七　日（日）　午前十時　役員研修会
二十四日（日）　午後二時　法華経講義

※継命新聞・新年号は十二月下旬に発送します。担当は『蛍池・服部』です。

平成十一年度　年回表

壱周忌	平成十年寂	
三回忌	平成九年寂	
七回忌	平成五年寂	
十三回忌	昭和六十二年寂	
十七回忌	昭和五十八年寂	
二十三回忌	昭和五十二年寂	
二十五回忌	昭和五十年寂	
二十七回忌	昭和四十八年寂	
三十三回忌	昭和四十二年寂	
三十七回忌	昭和三十八年寂	
五十回忌	昭和二十五年寂	

恵日　平成十一年一月号　通巻四十七号
平成十一年一月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
BBS：PXH05170（NIFTY）BMC92733（PCVAN）

恵日　一月号　通巻四七号　平成十一年一月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　定価一〇〇円